

清末英語文法書 4 点の依拠資料と編集 ——『英字入門』『英文挙隅』『英文話規』『英文漢詁』

田野村忠温

要旨：英文法に関わる中国人による早期の著作に曹驥『英字入門』（1874 年）、汪鳳藻『英文挙隅』（1887 年）、張德彝『英文話規』（1898 年）、嚴復『英文漢詁』（1904 年）がある。本小論は各書の作成に利用された依拠資料を特定し、作者が行った編集上の処理を明らかにする。いずれの著作も依拠資料の内容を基礎とし、それに若干の調整を施すという方法によって編まれている。中国人による英文法理解の歴史を論じる際には著作のそうした両面性を見極めることが不可欠である。

キーワード：清末英語文法書 『英字入門』 『英文挙隅』 『英文話規』 『英文漢詁』

1 はじめに

中国における英語に関する著作は、今確認できる限りにおいて、18 世紀中葉に編まれた旧式の類別語彙集『啖咕喇国訳語』に始まった（拙論(2021)）。

19 世紀の前半には、現実に使える英語の紹介を目的としたロバート・モリソン(Robert Morrison、中国名馬礼遜)による文法書『英吉利文話之凡例』、英語書名 *A Grammar of the English Language* (1823 (道光 3) 年)、マラッカの英華書院(The Anglo-Chinese College)で編まれた対訳文例集 *The English and Chinese Student's Assistant* (1826 (道光 6) 年)、英国商人ロバート・トーム(Robert Thom、羅伯聃)の語彙会話文例集『華英通用雜話』上巻、英語書名 *Chinese and English Vocabulary, Part I* (1843 (道光 23) 年)が出版された。いずれも英国人を主たる作者とする著作である。

中国人による実用的な英語学習書の著作は、19 世紀中葉に鄭仁山の著した『華英通語』道光本(1849 (道光 29) 年序)に始まった（拙論(2018)）。しかし、同書も、同書を起点として編まれた数々の類書も基本的に語彙会話文例集であり、文法に関する説明は含まない。¹

英文法に関する中国人の著述が始まったのは 19 世紀後半である。この小論では副題に示した早期の事例 4 件を取り上げ、各著作が何を依拠資料とし、どのように著されたかを考察する。

この問題を考える際に注意すべきは、各作者は英語を一通り習得しているにせよ文法の実研究者であるわけではなく、いずれの著作も西洋の書籍の翻訳、紹介を基本としているということである。作者が内容の面で行うことができたのは、話の細節や英語の学習に役立たない話題を

¹ 『華英通語』道光本より早く 1830 年代にはもっぱら漢字で書かれたピジン英語の語彙集が広州で出回っていた(Williams(1837))。『紅毛番話』と総称されるそうした語彙集も文法の説明は含まない。

省く、説明を分かりやすくする、語例や文例を中国人学習者にとって身近な内容のものに差し替えるなどの処置だけである。作者による翻訳、特に文法用語の訳語の考案は表現の面における創造的な要素と言えるが、訳語は定着することなくすべて廃れた。本小論では訳語に関しては最後の節で各著作の品詞名の対照表を掲げるなどするにとどめる。

各著作の評価、中国人による英文法理解の歴史を論じるためには、依拠資料に由来する内容と作者による調整の要素を明確に区別することが重要である。著作に書かれたことを直ちに作者の見解と見なすことはできないし、逆に依拠資料を同定するだけでは作者の思考や創意を明らかにすることができない。

2 曹驥『英字入門』(1874 年)

曹驥『英字入門』(1874 (同治 13) 年) は中国人の著した英語学習書のうちで文法の解説を含むおそらく最初のものである。



図 1 曹驥『英字入門』²

同書は「論英字源委」「単字門」「二字拼法門」「三字拼法門」「摘録四五六字拼法門」「摘録七字外拼法門」「数目字門」「点句勾股及異体字考」「学語要訣」「補論英字六則」「語彙類編」と題された 10 余りの部分で構成されている。

前半の諸部分では、英字の綴り字の字数を徐々に増やしてその読みを漢字による注音で「As 鴨司」「He 希」、「Can 鉛痕」「Way 為」、「Cash 鉛虚」「Want 黄脱」などのように説明し——注

² 『英字入門』の確認と図は内田慶市氏蔵本（刊行年不明）による。関西大学デジタルアーカイブ (<https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/>) で画像が公開されている。同本には欠葉があり、内田氏のご教示によれば周振鶴氏蔵本の画像で補ってある。図に示した扉も周氏本の画像である。『英字入門』の諸版の関係は未詳であるが、序文に「方今通商之國莫盛於歐羅巴洲」というくだりのある周氏本がおそらく初版である。ほぼすべての現存本ではその加点部が誤って「今方」「甚」と書かれている。

音は上海語の漢字の読みによっている——、そうした語を使った短い文例を挙げている。

序文に「爰不揣鄙陋輯訳是書」（ここに浅学を顧みず本書を編集、翻訳した）という説明はあるが、翻訳した原書は明らかにされていない。確認によれば、前半の諸部分には英国の学童に読み書きを教える教科書である William Mavor *The English Spelling-Book, Accompanied by a Progressive Series of Easy and Familiar Lessons*（1801 年初刊）が使われている。英字の綴り字の例や文例に両書に共通する要素が多いことからそのように判断することができる。

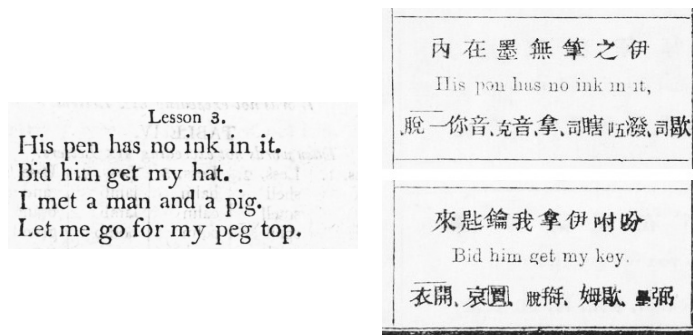


図 2 Mavor *The English Spelling-Book* 15 頁³（左）

図 3 『英字入門』第 25 葉表⁴（右）

後半の諸部分の 1 つである「学語要訣」が中国人の著した最初の英文法の解説である。これは同じく英国の小学校英語教科書である George Currey *An English Grammar, For the Use of School*（1856 年）によっている。「学語要訣」は次の説明で始まる。「文法」の語も使われている。

英国学語之法、另有一書、名 Grammar。所以学文法之巧妙、又句語之対合也。変化無窮、非浅学所能窺其底蘊。今特摘録其要者、以学者入門後之揣摩焉。（英国の言語学習法に関してはもう 1 冊 Grammar という本がある。文法の精妙と語句の組合せを学ぶためのものである。（文法的な）変化は限りなく、浅学者に深く理解できるものではない。ここに要点を記し、学習者の入門後の手引きとする。）

脈絡もなく出て来る“もう 1 冊 Grammar という本がある”という説明は奇妙であるが、おそらく作者の曹驥の手元に前半の諸部分の底本として使った Mavor の教科書に加えて Currey の教科書があったということであろう。

「学語要訣」では、英語に 9 つの品詞がある——具体的には「実字 Nouns substantive⁵」「加実字 Adjectives」「称呼字 Pronouns」「綱目字 Articles」「動作字 Verbs」「加動作字 Adverbs」「位

³ 同書は初刊後 1 世紀近くになっても多くの出版者によって再版された。しかし、『英字入門』での引用との対照に基づいて言えば、底本とされた可能性のある版は少ない。図は 1809 年の版による。

⁴ 中国語文および英文の下に書かれた漢字によるその注音は右から左に向かって書かれている。

⁵ 実際には‘Nouns substantives’と書かれているが——底本における‘Nouns substantive, or substantives’を正しく理解しないで圧縮している——、訂正して引用した。

置字 Prepositions」「相連字 Conjunction^(ママ)」「呼声字 Interjections」——とする見方に基づく英文法の解説が述べられている。

次は複合名詞に関する説明の一節である。縦長の図は誌面の節約のために左に 90 度回転して掲げる。

Substantives are often made up or compounded of two substantives—
schoolroom, railway, candlestick.

In some compound substantives it is usual to place a - (called *hyphen*) between the two parts of the word—
tea-chest, hearth-brush, arm-chair.

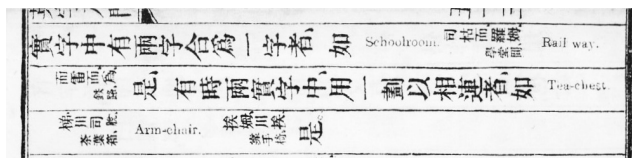


図 4 Currey *An English Grammar* 19~20 頁 (上)

図 5 『英字入門』第 53 葉裏 (下、左 90 度回転)

『英字入門』における綴り字と英文法の解説は上記 2 件の底本によっているが、文例の多くは独自に準備されたと見られる。日常的な挨拶や商取引の場面で使う表現が多く、おそらく曹驥がそのような種類の英語の知識を有していたのであろう。中には例外的に西洋人のための上海語の学習書 John MacGowan *A Collection of Phrases in the Shanghai Dialect* (1862 (同治 1) 年) から取られたと見られる文例もある。⁶

勿但文字好而且品行高 *veh dan vung z hau, url t'sēa*
p'ing yung kau. Not merely is his learning great, but his actions also are of a superior character.

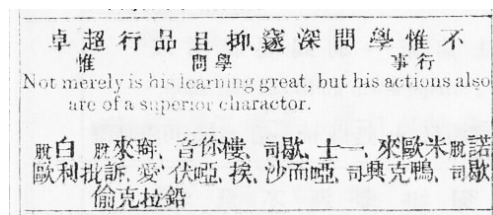


図 6 MacGowan *A Collection of Phrases in the Shanghai Dialect* 58 頁 (上)

図 7 『英字入門』第 45 葉裏 (下)

粗い確認の限りでは、英文法の解説に関して曹驥が独自に加えたと思しき要素は見当たらない

⁶ 語彙集の内容については断片的にしか確かめていないが、時刻の表現のところに馮祖憲『英話註解』(1860 (咸豐 10) 年) と一致する部分がある。

い。作者の創意を汲み取れるのは、中国語との関係や中国人学習者の関心を考慮して挙げられたであろう「兄 Elder Brother」「弟 Younger Brother」、「燕窩 Bird's nest」「魚翅 Shark fins」のような語句や「爾会説中国話否 Can you speak Chinese?」のような文だけである。

『英字入門』は多くの箇所です語句や文の例を1つずつ四角形の枠に入れて示している——図3、図7が文例の様子である——。英語学習書におけるこの様式の使用はトーム『華英通用雑話』に始まり、同書を中核的な底本として編まれた鄭仁山『華英通語』道光本、そしてそこから派生的に編まれた多数の英語学習書に継承された。本小論で取り上げる英文法に関わる著作4点のうちでこの様式を使っているのは『英字入門』だけである。そして、文例に日常会話や商取引に関わる性質のものが多いのも『華英通用雑話』の流れを汲む英語学習書の特徴である。

3 汪鳳藻『英文挙隅』（1879年）

次に汪鳳藻『英文挙隅』（1878（光緒4）年曾紀沢序、1879（光緒5）年刊）について述べる。

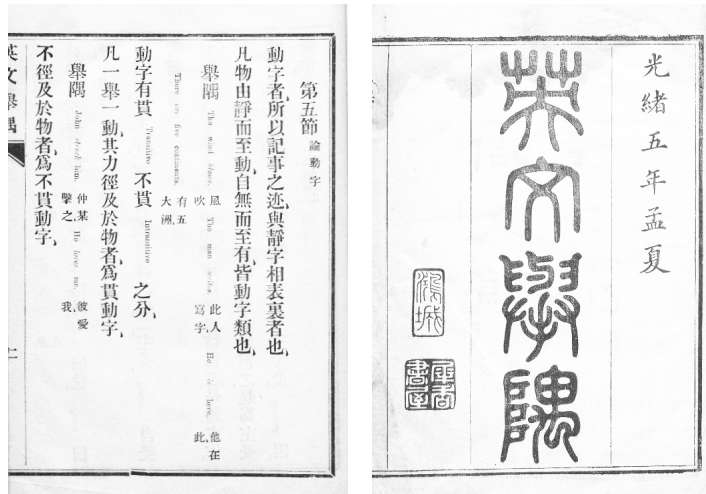


図8 汪鳳藻『英文挙隅』⁷

同書は巻頭の「凡例」で「美国喀爾氏文法第二十一次刊本」の大綱を訳したと説明している——そこでも「文法」という語が使われている——。書名は書かれていないが、確認によればそれは米国の小学校英語教科書である Simon Kerl *An Elementary Grammar of the English Language* 第21版（1868年）である。⁸ 以下で見る通り、書籍の構成も内容もよく合致している。⁹ 鄒(2007)

⁷ 『英文挙隅』の確認と図は中国国家図書館蔵本による。同館の数字（デジタル）図書館（<http://read.nlc.cn/>）で画像が公開されている。

⁸ 巻頭の‘Preface’で public school の初学者のために著したと説明されている。本文で大きな字が使われており、読み書きの基礎を身に付けた10歳前後の児童を対象としていると推定される。

⁹ Simon Kerl には英語教科書の著作がほかにも多数ある——*First Lessons in English Grammar*、*A Common-School Grammar of the English Language*、*A Comprehensive Grammar of the English Language for*

と邱(2008)はこの「喀爾氏文法」は Kerl の *A Common-School Grammar of the English Language* だとしているが、該書は構成が『英文挙隅』と大きく異なる。また、蘇(1981)、高(2007)、鄒(2009)、Wong(2017)は底本を Kerl の *English Grammar* だとするが、同人にそのような書名の著作はない。

また、「凡例」に言及はないが、『英文挙隅』は一部の内容にはやはり Simon Kerl の著した教科書である *First Lessons in English Grammar* の巻末の‘Appendix’を使っている。同書にも複数の版があるが、そのうちのどれが使われたかは分からないので、ここでは出版年が *An Elementary Grammar of the English Language* 第21版に近い1866年の版を確認に使う。¹⁰

『英文挙隅』の20余りの節の内容が上記2件の底本のどの部分に由来するかを表の形で示せば次の通りである。

表1 『英文挙隅』の各節と底本の対応¹¹

『英文挙隅』の節	底本とその章	
総論	Simon Kerl <i>An Elementary Grammar of the English Language</i>	1 Introductory view
1 論静字		2 Nouns and pronouns
2 論代静字仍兼及静字		3 Articles
3 論区指字		4 Adjectives
4 論繫静字		5 Verbs
5 論繫動字		6 Adverbs
7 論縮合字		7 Prepositions
8 論承転字		8 Conjunctions
9 論発語字		9 Interjections
10 論用字之法 凡16款		10 Rules of syntax
11 論造句之法 凡6款		12 False syntax
12 弁譌1 以用法諸款為準 凡7条		
13 弁譌2 字類 凡5条		
14 弁譌3 雜誌 凡5条		13 Analysis of sentences
15 章句条分	Simon Kerl <i>First Lessons in English Grammar, Appendix</i>	Words used in different ways (p. 167)
16 同字異用		Punctuation (pp.159-164)
17 句点式号 雜用記号 弁音記号		Capital letters (pp.157-159)
18 字体異宜		Rules for spelling (pp.154-156)
19 拼音簡例 凡6款		Derivation (pp. 156-157)
20 変字例略		Ellipsis (p. 168)
21 省字		Inversion (p. 168)
22 倒句		

『英文挙隅』と各底本の記述が対応する様子を1例ずつ示す。まず、次は *Elementary Grammar of the English Language* が‘4. Adjectives’で‘definitive adjective’なる必ずしも一般的には語られない

the Use of Schools など——。相互の重複も多いが、『英文挙隅』の中心的な底本とされたのは内容および版数の点で *An Elementary Grammar of the English Language* の第21版だと判断してよい。

¹⁰ 内容は前後の数版とほぼ同一であり、その範囲内であればどの版を使っても議論に影響はない。

¹¹ 『英文挙隅』の各節の標題は「第一節 論静字」のように書かれているが、「第」と「節」は省いた。また、標題に含まれる漢数字はすべて算用数字に置き換えた。

An Elementary Grammar of the English Language の章の標題は‘1. INTRODUCTORY VIEW’のように書かれ、‘Chapter’などの表示はない。*First Lessons in English Grammar* には‘Appendix’が2つあり、それぞれ157～164頁、167～168頁である。第2の‘Appendix’はおそらく改版時の追加であろう。

概念について述べた一節と、それに対応する『英文挙隅』の「第四節 論繫静字」の一節である。

What is a *definitive* adjective ?
 A **definitive** adjective merely limits or modifies.
 Ex.—*Four* peaches; *all* peaches; *some* peaches; *this* peach.
 Which are the principal definitive adjectives ?
All, any, both, certain, each, every, either, else, few, many, many a, much, neither, no, one, other, own, same, some, such, that, this, very, what, which, and yon or yonder.
 Also, *one, two, three, etc.*; *first, second, third, etc.*
 Nearly all the adjectives of the first class are usually called *pronominal* adjectives, some of them being occasionally used as pronouns; and those of the second class are called *numeral* adjectives. Since we may refer to objects *definitely*,

定限者、凡數目字、及彼此多寡之屬、皆是也。

定限一類、其可得而數者、爲	All	全	Any	何任	Both	者	Certain
某	Each	各	Every	每	Either	或	Else
餘	Few	少	Many	多	Many a		
許	Much	全	Neither	無	No	無	One
多	Many	上	Neither	無	No	無	One
同	Same	有	Such	此	That	那	This
何	What	何	Which	Which	Which	Which	Which
一	One	一	Two	二	Three	三	First
第	First	第一	Second	第二	Third	第三	Third

等字、及

図9 Kerl *An Elementary Grammar of the English Language* 24 頁（1868 年）（上）

図10 『英文挙隅』第8葉裏（下、左90度回転）

挙げられた語例も一致し、違いは“yon or yonder”（あそこの）の yon を省いていることだけである。底本に小字で書かれた解説は『英文挙隅』では省かれている。

次は *First Lessons in English Grammar* の‘Appendix’における接辞の説明に挙げられた例と、それに対応する『英文挙隅』の「第二十節 変字例略」における記述である。

PREFIXES.	ROOTS.
<i>De</i> , down.	<i>De</i> - press; to press down.
<i>Re</i> , again.	<i>Re</i> - build; to build again.
<i>Ex</i> , out.	<i>Ex</i> - pel (drive); to drive out.
<i>Con</i> , together.	<i>Con</i> - nect (join); to join together.
<i>Un</i> , not.	<i>Un</i> - sound; not sound.

左旁	本字	變字
<i>De</i> 下	<i>Press</i> 壓	<i>Depress</i> 壓下
<i>Re</i> 再	<i>Build</i> 造	<i>Rebuild</i> 再造
<i>Ex</i> 外	<i>Port</i> 口	<i>Export</i> 出口
<i>Con</i> 合	<i>Sort</i> 類	<i>Consort</i> 匹偶
<i>Un</i> 不	<i>Just</i> 正	<i>Unjust</i> 不義

図11 Kerl *First Lessons in English Grammar* 157 頁（1866 年）（上）

図12 『英文挙隅』第52葉表～裏（下、左90度回転）

作者の汪鳳藻はここでは底本の記述に若干の調整を施している。まず、底本の 2 列の書き方では「de- + press → depress」のような派生の過程が判然としないので、それを 3 列の書き方に改めている。また、expel と connect の例を export、consort で置き換えているのは、おそらく pel と nect は独立語として使えないために例として分かりにくいと判断したということであろう。

学習者の理解に配慮しているところはほかにもあり、例えば「第十四節 弁論三 雜誌 凡五条」では否定の過剰使用の例として“I will never do so no more.”という文例を底本から引用したあと、正しくは“I will never do so any more.”または“I will do so no more.”だという説明を補っている。

4 張徳彝『英文話規』(1898 年)

引き続き張徳彝『英文話規』(1895 (光緒 21) 年序、1898 (光緒 24) 年刊) について述べる。

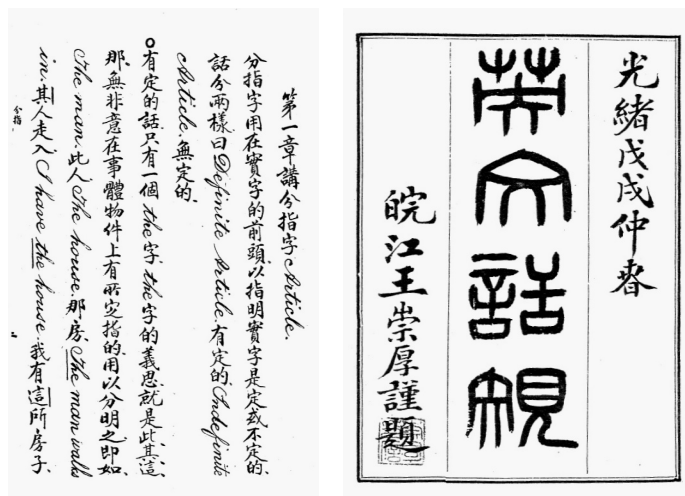


図 13 張徳彝『英文話規』¹²

「話規」は grammar の訳語である。おそらく作者自身の造語であろうが、30 年余り前のオランダ人宣教師 Antoon Everard Smorenburg によるフランス語文法書『法国話規』上巻、フランス語書名 *Grammaire française, Première partie* (1864 (同治 3) 年) でも使われている。

董・張(2004)は『英文話規』を依拠資料によらない著作だと説明しているが、序文に「註解亦不能略」((英文法は複雑なので簡単には説明できず) 注釈も省けない)、「竭力就簡削繁訳成編帙」(簡を要として努めて煩を省き、訳書を成した)と書いてある。確認によれば、同書は主に英国の William Chambers、Robert Chambers 兄弟の編集による 2 冊の英語教科書 *English Grammar and Composition* (1853 年) と *Introduction to English Grammar* (1854 年) を混ぜて使っている。

『英文話規』は、「第一章 講分指字 Article」から「第九章 講発語字 Interjection」に至る 9

¹² 『英文話規』の確認と図は中国国家図書館蔵本による。董光和・張国喬編(2004)『醒目清心録』13 (全国図書館文献縮微中心) に影印が収められている。

つの章で各品詞について解説している。次は、それに先立って英語に品詞が 9 つあるという巻頭の説明とそれに対応する *English Grammar and Composition* のくだりである。

15. There are in English nine classes of words, called parts of speech—namely, Noun, Article, Adjective, Pronoun, Verb, Adverb, Preposition, Conjunction, and Interjection.

英語の九品詞は九類の語句
 所分九類
 第一 Article. 冠詞
 第二 Noun. 名詞
 第三 Adjective. 形容詞
 第四 Pronoun. 代名詞
 第五 Verb. 動詞
 第六 Adverb. 副詞
 第七 Preposition. 前置詞
 第八 Conjunction. 連詞
 第九 Interjection. 感嘆詞

図 14 W. and R. Chambers (eds.) *English Grammar and Composition* 6 頁（上）

図 15 『英文話規』第 2 葉表（下、左 90 度回転）

底本で 9 品詞の第 2 位に置かれていた冠詞を『英文話規』が首位に昇格させているのは、中国語にない種類の語であることから取り立てて示そうと考えたということであろうか。

次は名詞複数形について *Introduction to English Grammar* によって述べた第二章の一節である。

46. RULE II.—Words ending in *ch* soft, *s*, *sh*, *x*, or *o*, take *es* instead of *s* only; but *o* after another vowel takes only *s*; so does grotto, and a few other words.

Examples.—Church, churches; kiss, kisses; brush, brushes; fox, foxes; hero, heroes.

Folio, folios; canto, cantos; quarto, quartos; solo, solos; tyro, tyros.

① 離詞改多數有以是法在語尾加 *ch, s, sh, x, o*.
 語尾 *ch* 者加 *es*. 一 *church*. 二 *churches*. 一 *glass*. 十 *glasses*.
 一 *brush*. 二 *brushes*.
 一 *fox*. 二 *foxes*. 一 *hero*. 三 *heroes*.

図 16 W. and R. Chambers (eds.) *Introduction to English Grammar* 11 頁（上）

図 17 『英文話規』第 5 葉表～裏（下、左 90 度回転）

語例の *kiss* を *glass* に変えているのは、接吻の含意の社会差を考慮してのことであろう。¹³

¹³ 子音+o で終わる名詞には例外もあるが -es を加えるという底本の説明を変えて、-ro で終わる名詞

以上の底本以外に David Salmon Longman's *School Grammar* (1890 年) も若干利用されている。

作者の張德彝による新しい要素はやはり文法の説明には見出せず、語句や文の例の面に限られる。固有名詞の例を James、London から「Confucius 孔子」「Pekin 北京」に変え、文例中に「Chiang-kan 蔣幹」「Sun-sheêng 孫生」という人名を使い、「We worship Buddha. 我們供仏」「Lama's temple. 喇嘛的廟」「Tao-kian's chrysanthemums. 陶潛的菊花兒」「Shanghai is a Chinese sea-port. 上海是一個中国的海口」のような中国、アジアに関わる内容の文や句の例を使っているのは、中国人学習者が実感を持って英語を学べるようにするための配慮であろう。

品詞に関する 9 つの章の後に「英文点句子的点兒」(英語で文に点を打つときの点)、すなわち、句読点を始めとする各種の記号に関する比較的長い解説が置かれているが、これは『英文挙隅』の「第十七節 句点式号 雜用記号 弁音記号」の内容をほぼそのまま繰り返したものである。

5 敵復『英文漢詁』(1904 年)

敵復の著した『英文漢詁』、英語書名 *English Grammar (Including Grammatical Analysis) Explained in Chinese, By Julin Khedau Yen-Fuh*¹⁴ (1904 (光緒 30) 年) は、以上の各節で見てきた 3 件の著作——いずれも縦書き右綴じの線装本であった——と異なり、横書き左綴じの洋装本である。



図 18 敵復『英文漢詁』¹⁵

だけの話にしているのは誤りである。tomatoes、echoes、embargoes など種々の子音+o の例がある。

¹⁴ 英語書名中にある‘Julin Khedau’は敵復の字「又陵」「幾道」である(黄(2008))。

欧・林(2014)、欧(2015)は Julin と Khedau をウェード・ジャイルズ式 (Wade-Giles) によるローマ字表記と説明しているが、「又陵」「幾道」のウェード・ジャイルズ式表記は Yuling、Chitao である。「敵復」も Yen-Fuh ではなく Yen-Fu である。Julin と Khedau は lin、khe という綴り字が示唆するように「又陵」「幾道」の方言読み(内田(2012))を独自の方式でローマ字化したものであろう。

¹⁵ 『英文漢詁』の確認と図は京都大学吉田南総合図書館蔵本による。扉に‘SECOND EDITION’、‘1904’、

『英文漢詁』はこれまでに見た各著作に比べて内容の量が多い。粗い見積りによれば、4 倍ないし 6 倍程度の量がある。¹⁶ 英文法の解説が詳細で、挙げられた語例や文例も豊富である。したがって、依拠資料との関係についてもより詳細な確認に値する。

5.1 『英文漢詁』の依拠資料——総論

嚴復は依拠資料について巻頭の「英文漢詁叙」で「英人馬孫、摩栗思等之説」（英国人馬孫、摩栗思らの説）を参考にしたと説明するが、それ以上のことは明らかにしていない。

筆者の確認によれば、『英文漢詁』は次に示す英国で出版された 2 冊の英語教科書に基づいて著されている。いずれも版の特定はむずかしく——版間の内容の差は必ずしも大きくない——、ここには筆者がかりに考察に用いる版の版数と出版年を記す。

Charles Peter Mason 著 *English Grammar Including Grammatical Analysis* 第 40 版（1901 年）

Richard Morris 著、Henry Bradley 改訂 *English Grammar* 第 3 版（1903 年）

『英文漢詁』の英語書名の主要部である *English Grammar (Including Grammatical Analysis)* は Mason の教科書の書名に実質上一致している。Mason の教科書は文字が比較的小さく頁数も多く、小学校高学年かそれ以上の学習者を対象としていると見られる。上記の 2 冊以外にも参考にした書籍があった可能性はあるが、あったとしても補助的な役割にとどまったはずである。

『英文漢詁』の依拠資料に関する従来の記述を確かめると、鄒(2007)は、上で触れた「英人馬孫、摩栗思等之説」について、「馬孫」と「摩栗思」はそれぞれ英語に関する著作のある Charles Peter Mason、Richard Morrison ではないかとの推定を述べている。前者は当たっているが、「摩栗思」は Morrison ではなく Morris であったことになる。また、内田(2012)は『英文漢詁』の本文開始部について Mason の *English Grammar Including Grammatical Analysis* の 3 つの版と対照して考察している。欧(2015)は『英文漢詁』が Mason の *English Grammar Including Grammatical Analysis* (1873 年) と Richard Morris の *Historical Outlines of English Accidence* (1877 年) によって述べている。Mason の教科書は内田(2012)、欧(2015)、本小論で見解が一致するが、Morris の教科書は欧の言う *Historical Outlines of English Accidence* ではなく上記の *English Grammar* が使われている。

『英文漢詁』は 2 つの底本を章ごとに使い分けている。各章が主にどの底本のどの章に基づ

奥付に「光緒三十年五月首版」「光緒三十年七月再版」と記されている。巻末に正誤訂正の 1 葉があり、それが再版に追加されたものか初版にもあったものかは不明であるが、本文はおそらく初版と再版で共通であろう。引用にはその訂正を（変更がかえって改悪になるものを除き）反映させる。

なお、『英文漢詁』には版による種々の差異があり、後年の版は英語の記法の慣習を知らない人物による不適切な改変を含んでいたりもする。したがって、研究には初期の版を使うことが望ましい。

¹⁶ 本文の全頁が当該書の字詰めに従って漢字で埋め尽くされていると仮定したときの総字数を比較した。

いているかを示せば次の通りである。Mason の教科書では章の標題に番号が付けられていないが、言及の便宜上それを補う。以後、底本への言及は著者名の Mason、Morris だけによる。

表 2 『英文漢語』の各章と底本の対応¹⁷

『英文漢語』の章	底本とその章	
1 発凡 Introduction	Mason	1 Introduction
2 正書 Orthography	Morris	2 Orthography
3 字論 Etymology		3 Etymology
4 名物部 Nouns		4 Nouns
5 区別部 Adjectives		5 Adjectives
6 称代部 Pronouns		6 Pronouns
7 云謂部 Verbs		7 Verbs
8 疏状部 Adverbs		8 Adverbs
9 介系部 Prepositions		9 Prepositions
10 挈合部 Conjunctions	Mason	9 Conjunctions
11 嗟歎部 Interjections	Morris	11 Interjections
12 制字 Word-making		12 Word-making
13 句法 Syntax		13 Syntax
14 論句主謂語 Subject and predicate	Mason	12 Syntax
15 句法分類 Classification of sentences		
16 造句集例 Summary of the rules of syntax		
17 析辞 Analysis of sentences		13 Analysis of sentences
18 句読点頓 Punctuation		14 Punctuations

5.2 『英文漢語』各章の底本と厳復による記述の調整

これより、『英文漢語』の章の順に従って底本との内容上の対応と不一致の様子について具体的に述べる。『英文漢語』は Chapter を「篇」と訳し、「篇一」「篇二」のように書いているが、読みやすさのために現代式に「第 1 章」「第 2 章」のように書く。

(1) 第 1 章 発凡——導入

『英文漢語』の「第 1 章 発凡 (Introduction)」は実質上ほぼ 1 頁の短いもので、Mason の第 1 章‘Introduction’を大幅に簡略化した形になっている。『英文漢語』の第 1 章は次のような記述で始まる。英字の大小は原文の通りである (以後同様)。

語言文字者所以達人意 thought 者也。其所達者謂之辞, Speech or Language.

(『英文漢語』1 頁)

Mason の第 1 章は次の記述で始まる。

Speech or language is the expression of thought by words.

(Mason 9 頁)

それに続く部分も次のように対応している。以後は底本と『英文漢語』の順に並べる形で引用する。厳復は grammar を「文譜」と訳している。

¹⁷ 『英文漢語』の標題は本文による。目次に書かれた標題には不一致の要素がある。

Grammar (from the Greek *gramma*, 'letter') is the science that treats of speech or language.

English Grammar is that portion of the science which treats of the speech of the English people.

(Mason 9 頁)

究辞之理，著其律令，使文從字順者，謂之文譜。文譜 **Grammar**，其字原於希臘之 *gramma* (文字)；英文譜，其所論者為英文。(『英文漢詁』1 頁)

しかし、それに続くわずかな量の内容は Mason の第 1 章には直接対応を見出せない。厳復が Mason、Morris あるいは別のところから得た知識を簡単に紹介したのであろう。

(2) 第 2 章～第 12 章——正書法、品詞、語形成

『英文漢詁』の第 2 章から第 12 章にかけての各章は主に Morris の教科書の同じ番号の章に基づいている。例外的にもっぱら Mason によっている第 10 章については後の(3)で述べる。

「第 2 章 正書 (Orthography)」は「論字母与其音 (Sounds and letters)」という節で始まるが、Morris の第 2 章も同じく 'Sounds and letters' という節で始まる。次のようなくだりの説明の内容もほぼ原文の通りである。

Lip-sounds are called Labials; teeth-sounds Dentals; throat-sounds Gutturals; hissing-sounds Sibilants; palate-sounds Palatals; nose-sounds Nasals.

(Morris 16 頁)

有唇音，謂之 labials；有齒音，謂之 dentals；有喉音，謂之 gutturals；有腭音，謂之 palatals；有鼻音，謂之 nasals；此外尚有對齒嘶音，謂之 sibilants，如下圖。(『英文漢詁』3 頁)

Morris は母音については“声帯で生じる音が口腔の形状によって音色を変えるもの”のような抽象的な説明ですませているが、厳復は原文を翻訳するだけでなく、母音には a、e、i、o、u の 5 つがあるなどの説明を加えている。¹⁸

¹⁸ しかし、その説明の内容はまったく不適切である。厳復は「元音有五，曰 a, e, i, o, u，同於中国之宮商角徵羽；a 商, e 角, i 徵, o 宮, u 羽也」(母音は a, e, i, o, u の 5 つがあり、中国の宮商角徵羽と同じだ、云々)と言う。「宮商角徵羽」は本来音階を表す音楽用語であったが、鄭樵『七音略』(12 世紀)で子音の調音位置を言う音韻用語として使われた(鄧(2002))。厳復による母音へのその適用がどのような判断に基づくものであったかは不明であるが、いずれにせよ文字とその発音——節の標題に言う「字母与其音」——を混同したこの説明は英語の母音に関する正しい知識を伝えることができない。母音字は 5 つであるが、英語の母音はそれよりはるかに多い。1 つの母音字が種々の発音を表すことは Mason も多数の例を挙げて説明しているが、『英文漢詁』の記述からはその重要な事実が分らない。

厳復は『英文漢詁』の草稿である(鄧(2007))『英文漢解』(中国歴史博物館蔵残稿)では英語の短母音が 13 種類あることなどを述べた Mason の記述を翻訳している。『英文漢解』でも英語に母音が 5 つあり、それが「宮商角徵羽」に対応すると説明しているが、加えて母音の「正変」が 13 あるという説明がある。しかし、『英文漢詁』ではその部分は省かれた。なお、『英文漢解』の確認は王弼主編『厳復集 第 2 冊 詩文(下)』(中華書局、1986 年)所収の翻字による——同書が『英文漢解』を 1910

もっとも、調音音声学に関わる基礎知識は誰が書いても同様の説明になりがちであり、記述が互いに似ていても必ずしもそこに借用の関係を認定することはできない。しかし、Morris と『英文漢詁』に掲げられた英語の子音と母音の表に見る類似は偶然の一致によるものではあり得ない。

§ 9. TABLE OF ENGLISH SOUNDS.					
I. Consonants.					
STOPS.		SPIRANTS.		Nasals.	
	Voiced.	Unvoiced.	Voiced.	Unvoiced.	
Gutturals	G (g ^o)	K	...	H	Ng (sing)
Palatals	...	...	Y (yes)	...	...
Dentals	D	T	Dh (bathe)	Th (bath)	N
Labials	B	P	V W	F Wh	M
Voiced Sibilants: Z Zh (=s in pleasure).					
Unvoiced „ S Sh.					
Liquids: L R.					
The <i>ch</i> in change = <i>t+sh</i> . <i>J</i> = <i>d+zh</i> .					
II. Vowels.					
<i>a</i> in gnat. <i>a</i> in pair (= <i>e</i> in there). <i>a</i> in fame (= <i>ei</i> in vein). <i>a</i> in father. <i>a</i> in all (= <i>au</i> in laud). <i>e</i> in met. <i>e</i> in me (= <i>i</i> in machine).			<i>ea(r)</i> in earth. <i>i</i> in knit. <i>o</i> in not (= <i>a</i> in want). <i>o</i> in no. <i>o</i> in move (= <i>u</i> in rude). <i>oo</i> in wood (= <i>u</i> in put). <i>u</i> in nut (= <i>o</i> in come).		

§ 6. 英字僕音表					
I. TABLE OF ENGLISH CONSONANTS.					
諸音	促者		舒者		捉鼻
	鈍	銳	鈍	銳	
喉音	G 如在 (go)	K, C 如 (hard)		H 如在 (sing)	Ng 如在 (sing)
腭音			Y 如在 (yes)		
齒音	D	T	Dh 如在 (bathe)	Th 如在 (bath)	N
唇音	B	P	V, W	F, Wh	M
對齒			Z, Zh =soft s.	S, sh.	
弄舌			R	L	

此外尚有 *ch* in change = *t+sh*. *J* = *d+zh*.
J 在他國, 其音與 *y, i* 畧同, 故 *Johan* = 約翰.

II. 英字元音表 VOWELS.

a in father 音阿, 正六麻, 二十一馬, 二十二禱音.
a „ all (= *au* in laud) 五歌, 二十舒, 二十一箇.
a „ fame (= *ei* in vein) 唉;
a „ pair (= *e* in there) 挨;
a „ gnat 入聲短呼, 七曷, 八黠.
e „ me 音伊, 正四支音.
e „ met 入聲短呼, 九屑.

ea(r) in earth 而
i in knit 入聲, 十二錫, 十四緝.
o in not 入聲, 十藥.
o in no 在五歌七虞之間.
o in move (= *u* in rude) 七虞音.
oo in wood (= *u* in put) 入聲一屋.
u in nut 入聲十五合十七洽.

図 19 子音と母音の表——Morris 17 頁 (左)、『英文漢詁』4 頁 (右)

「第 3 章 字論 (Etymology)」は英語の品詞の解説で始まる。その最初の節では Morris の ‘Parts of speech’ という標題に厳復は品詞の数を補って「八部 (Eight parts of speech)」にしている。品詞数が 9 でなく 8 であるのは、Morris が冠詞を形容詞に含めていることによる。次は当の節の開始部分である。

- Words used as *names* are called **Nouns**; as, *John* saw a *snake* in the *garden*.
- Words used *for Nouns* are called **Pronouns**; as, *I* told *John* the snake would not hurt *him* or *me*, if *he* left *it* alone, to go *its* own way. (Morris 20 頁)
- 物各有名, 而字為之名者, 謂之名物之字 **NOUNS**. 如云 “鳶飛戾天, 魚躍於淵,” 若鳶若魚若天若淵, 皆名物已. “*John* puts *books* upon *table*.”¹⁹
- 名以代物, 以屢稱之不便於辭, 故又有其代名者, 謂之称代之字, **PRONOUNS**. 如云 “吾亦欲東耳安能鬱久居此乎,” 吾与此皆称代字, 吾以代劉邦, 此以代漢中. “*You* will tell *James* to

～1911 (宣統 2～3) 年の期間の執筆として扱っているのは誤りであろう——。

¹⁹ 冠詞の欠如という初歩的な誤りが厳復の英語習熟の程度を示している。後の版では訂正されている。

(『英文漢詁』9頁)

以後の各章も似た状況であるので、対応例を 2 例挙げるにとどめる。次は形容詞を解説した「第 5 章 区別部 (Adjectives)」の「門類 (Classification)」という節における形容詞の分類である。これは分類を述べただけの単純な内容であり、ほぼ完全に一致する。

(Morris 36 頁)

(『英文漢詁』 29 頁)

-er (或用 -ar- 亦用 -or); 如 *baker* 炊者, *begg-ar* 乞兒, *do-er* 為者, *sailor* 舟人, *cloth-i-er* 裁縫, *law-y-er* 律師.

²⁰ 「漢中」は地名。劉邦は漢中の地に封ぜられ、漢王を称した。

-ster ; (其始皆用於陰属) *spin-ster* 紡者, 処子 ; 乃至 *song-ster* 歌者, *malt-ster* 麴者, 無陰陽之別矣. (『英文漢詁』 102 頁)

-ster に関する Morris の “It merely marks the agent in *song-ster*, *malt-ster*.” (-ster は *songster*, *maltster* では単に動作主を表すだけである。) という説明はそこから趣旨を読み取ることがむずかしいが、厳復はおそらく Mason の “-ster の付く語は今や男を指すものや人名として使われるものも多いが、かつては女の行う職業を表していた” とする次の記述に基づいて説明を補っている。²¹

Spinster still preserves the feminine force of the suffix. Many words in *-ster* now used as masculine (or common), or as proper names, once denoted occupations carried on by women, as *maltster*, *tapster* ('bar-maid'), *Baxter* (from *bake*), *Webster* (from *webban* 'to weave'), &c. (Mason 25 頁)

(3) 第 10 章 拏合部——接続詞

「第 10 章 拏合部 (Conjunctions)」では前後の諸章で使っている Morris に代えて Mason が使われている。Morris の接続詞の章はわずか 1 頁で、等位接続詞と従属接続詞の 2 種類があるという程度の説明しかしないことから、Morris を使ったものと考えられる。

Mason は第 9 章 'Conjunctions' で等位接続詞と従属接続詞を下位分類し、個々の接続詞に関する解説を述べている。『英語漢詁』の記述の内容と順序もほぼそれを踏襲している。説明を分かりやすくしたり、英語の学習に不要な話——例えば、古英語や他の印欧語に関わる事項——を省いたりしていることはほかの章と同じである。

(4) 第 13 章 句法——統語論

「第 13 章 句法 (Syntax)」はその大半の節が Mason の第 12 章 'Syntax' の 141~152 頁に基づいているが、一部の節は Morris によっている。

Mason に基づいている範囲では、'The predicative relation'、'The attributive relation'などの多くの節の英語標題が一致しており、記述内容や文例にも共通性が高い。次は語、句、節による名詞の修飾を互いに言い換え得ることを説明した一節である。

One attributive adjunct may often be replaced by another. Thus, for “The king’s palace” we may say ‘The palace of the king,’ or ‘The palace which belongs to the king,’ or ‘The palace belonging to the

²¹ しかし、厳復の理解が模糊としており、記述が混乱している。Morris は接尾辞を 'English suffixes'、'Latin and French suffixes'、'Greek suffixes' のように起源に応じて分けて記述しているが、厳復はその 'English suffixes' の標題を「論本英転成之字 (English derivative)」(英語起源の派生語) に変えている——*derivative* は後の版で複数形に訂正されている——。しかし、英語起源の接尾辞も借用による語幹にも付くので、この文脈で英語起源の派生語と言っても意味を成さない。また、「論本英転成之字」に複合語の話が続き、その後に借用による接辞の話が続くので、厳密な読み方をする読者が話を正確に理解することはほぼ不可能であったはずである。

king,' &c.

(Mason 147 頁)

以上五者、同為属詞、故亦随宜可以互易：如云 “The *king's* palace,” 可云 “The palace *of the King*,” 又可云 “The palace *which belongs to the king*,” 第一為襯字、第二為仿語、第三為子句、然而意義無毫髮之殊也。

(『英文漢詁』138 頁)

嚴復は、修飾の語句を斜体字とし、原文から引き継いだ 3 つの句がそれぞれどの種類の修飾であるかという説明を加える——文中の「^上襯字」「^上仿語」「子句」はそれぞれ語、句、節による修飾——などして学習者の理解に配慮している。

Morris によっているのは、「第 13 章 句法」の 12 の節 (§ 124～§ 135) のうち、直接目的語と間接目的語を論じた § 132 と § 133 の 2 節である。次はそこで非人称構文の目的語について説明した一節である。

The Objective case follows some few impersonal verbs, as it did in Old English; as, it repents *me*; *me* lists; it ails *me*; it irks *me*; it recks *me*; it concerns *us*; it grieves *me*.

(Morris 104 頁)

前§58 有言、無主之云謂、而姑以第三身‘it’字為之主名者、然此等云謂之下、例得有受事之実字：如 “it ails (病) *me*,” “irks (膩煩) *me*,” “it concerns *us*,” “it grieves *me*,” “it repents *me*,” “it recks *me*,” 乃至 “*me* thinks,” “*me* lists,” 各等語、皆以無主云謂而得直接受事者矣。

(『英文漢詁』141 頁)

ここでも嚴復は学習者にとって理解のむずかしそうなところは調整して訳している。まず、「無主云謂」、すなわち、非人称動詞は既出の概念であることを説明し——§58 と書いているのは§56 の誤りである——、中国人の英語学習に無用の古英語への言及は省き、原文では it で始まる文例の中にそうでない文例“*me* lists” (it pleases *me*) が 1 件だけ混じる形で挙げられていたのを改め、it 以外の語で始まる文例“*me* thinks” (it seems to *me*) を追加して類例があることを示している。²²

(5) 第 14 章～第 16 章——統語論の続き

「第 14 章 論句主謂語 (Subject and predicate)」 「第 15 章 句法分類 (Classification of sentences)」 「第 16 章 造句集例 (Summary of the rules of syntax)」は Mason の第 12 章‘Syntax’のそれぞれ 152～160 頁、160～171 頁、171～183 頁を章として独立させた形になっている。

次は主語と述語の関係を論じた「第 14 章 論句主謂語」で主語と動詞の数の一致について述べた一節である。

The verb is put in the plural number when it has for its subject two or more nouns in the singular

²² Morris が it で始まる表現と“*me* lists”を同列に扱っているのがそもそも妥当なのかという疑問もあるが、そのことは目下の文脈では問題ではない。

coupled by the conjunction *and*; as, “John and Thomas were walking together.” But when the compound subject is considered as forming one whole, the verb is kept in the singular; as, “The mind and spirit remains invincible;” “Hill and valley rings” (*Par. L. ii.*²³ 495); “Wherein doth sit *the dread and fear* of kings” (*Shakspeare, M. of V.*²⁴). (Mason 153 頁)

仮如主名之字雖單，而有二三主名，用 *and* 字為之關合，此其云謂宜用衆數：如云 “John and Harry *are* walking together;” (中略) 第此例又有變時：如 “Hill and valley *rings*,” 則大詩家 Milton 之句也；“Wherein *doth sit* the dread and fear of Kings,” 則 Shakespeare 之詞也；其所用云謂皆從單數者，蓋主句²⁵雖多，而言者視同一物，即如今云 “The mind and spirit *remains* invincible,” 亦達語也；學者總以不違大例為宜。(『英文漢詁』149 頁)

ここでは挙げられた文例はすべて Mason のそれに一致している。Mason はここでは文例にすべて通常の文字を使っているが、厳復は目下の文脈で注目すべき動詞を斜体字にして説明を分かりやすくしている。

「第 15 章 句法分類 Classification of sentences)」は Mason の第 12 節中の同題の節に対応している。次は単文と複文の関係を述べた一節である。

If we say, “He announced the arrival of Cæsar,” we get a simple sentence. If we say, “He announced that Cæsar had arrived,” we get a complex sentence, the substantive clause *that Cæsar had arrived* being substituted for *the arrival of Cæsar*. (Mason 161 頁)

如今云 “The Japanese announced *the destruction of Retvisan*,” 此簡句也，今改云 “They announced *that Retvisan has been destroyed*,” 此則包孕句法，其子句 *that Retvisan has been destroyed*，即代前句之受事仿語 *the destruction of Retvisan*，故為実字子句。

(『英文漢詁』163 頁)

ここでは厳復は原文におけるカエサル²³の到着に関わる文例を、当時のアジアでの出来事である日本軍のロシア戦艦レトビサンに対する攻撃に関わる文例に置き換え、中国の英語学習者が現実の描写として読めるように配慮している。Mason でこれに続いて書かれた “He has lost the book which I had given to him,” と “The boy went out to play on the completion of his task,” の文例は特定の社会に関わるものではないのでそのまま使われている。ここでも厳復は文例中の注目すべき箇所を斜体字に変えている。

「第 16 章 造句集例 (Summary of the rules of syntax)」はそれまでの各章の内容や補足的な説明を 21 件の規則の形にまとめたものである。‘Summary of the rules of syntax’ という標題は Mason

²³ Milton *Paradise Lost*, Book II.

²⁴ Shakespeare *Merchant of Venice*.

²⁵ 「主句」は後の版では「句主」と訂正されている。

の節標題を継承したものであるが、書かれている規則は Mason のそこでの記述と単純に対応してはいない。

底本との関係を明瞭に確認できる内容の例としては、口語では“*It's me.*”などのように補語に対格代名詞が使われる現象に関する説明は Mason の‘Summary of the rules of syntax’に含まれる‘Anomalous construction’という項目における記述に基づいている。

A Personal Pronoun used as the complement of a verb of incomplete predication is sometimes put in the objective case instead of the nominative in colloquial language, as “That’s *him*,” “Who is there? *Me*, sir.” (Mason 177 頁)

In colloquial language objective case is some times used in the place of nominative: 談言之際，有宜用主名，而當以受事之位者；如云 “That’s *him*”=that is he; “Who is there? *me*, sir,” “Whom do men say that I am,” 皆此類也，而不得以破例論。 (『英文漢詁』 188～189 頁)

“Whom～”の文例は厳復による追加ではなく、Mason の後続する解説中に現れるものである。

第 16 章には Mason の教科書の‘Summary of the rules of syntax’以外の箇所から取られた内容もあれば、Morris に基づいて書かれている箇所もある。例えば、第 1 の規則‘Rule 1’は主語と定形動詞の数と人称の一致に関する基礎知識の要点を述べたものであるが、それは Morris の第 13 章‘Syntax’から取られている。

A finite verb is in the same number and person as its subject; as,

<i>I think</i>	<i>We think</i>
<i>Thou think-est</i>	<i>You think</i>
<i>He think-s</i>	<i>They think</i>

(中略) *I thinks* would be wrong, because *I* is the first person and *thinks* of the third. The subject of a finite verb is said to be in the Nominative case. (Morris 101 頁)

A finite verb is in the same number and person as its subject: 有專屬之云謂，其数与身従句主而為異。The subject of a finite verb is said to be in the Nominative Case: 句主常在主名之位；如云 “*I am*,” “*He thinks*,” 不得云 “*Me say*,” 亦不得云 “*I love-s*,” 或 “*They sleeps*.”

(『英文漢詁』 170 頁)

ここでも、厳復は解説を詳しくし、定形動詞は主語と数と人称が一致し、主語は主格だという話の後に、“*I am*.”、“*He thinks*.”とは言うが“*Me say*.”、“*I love-s*.”、“*They sleeps*.”などとは言えないという説明を加えている。

(6) 第 17 章 析辞——文の分析

文の構成を図解した「第 17 章 析辞 (Analysis of sentences)」は Mason の教科書の同題の第 13

章に基づいている。これについても共通する図を 1 組示すにとどめる。“That hero was deservedly called the saviour of his country.” (その英雄は当然のこととして祖国の救世主と呼ばれた) という英文の分析図である。

Analysis of Complex Predicate.				
503. The following examples show how a complex predicate (§§ 391—396) may be separated into its components :— “That hero was deservedly called the saviour of his country.”				
Subject with Adjuncts.	Predicate.		Adverbial Adjuncts of Predicate.	
	Verb of Incomplete Predication.	Subjective Complement.	Adverbial Adjunct of Verb.	Adverbial Adjunct of Complement.
that hero	was called	the saviour of his country	deservedly	

§ 174. Analysis of Complex Predicate: 析包孕謂語法.				
Example: “That hero was deservedly called the saviour of his country,” “此賢見稱其國之救主,可無媿色.” (參看 §141).				
Subject with Adjunct 句主帶指事之字	Predicate 謂語		Adverbial Adjuncts 疏狀屬詞	
	Verb of incomplete predication 不完謂語	Subjective complement 句主補謂	of Verb 云謂之疏狀	of Complement 補謂之疏狀
That hero 此賢	Was called 見稱	the saviour of his country 其國救主	deservedly 可無媿色	

図 20 文の分析図——Mason 185a 頁²⁶ (上)、『英文漢詁』194 頁 (下)

(7) 第 18 章 句読点頓

最終章である「第 18 章 句読点頓 (Punctuation)」は構成、内容ともにほぼ Mason の第 14 章 ‘Punctuation’ の通りである。²⁷

次は名詞と非制限的用法の関係節のあいだにはコンマを置く必要があることを説明した一節である。

But if the designation of the person or thing meant is complete without the relative sentence, so that the latter only extends and defines that designation, being *continuative*, and not *restrictive* (§412), then a comma must be introduced. Thus: “We are studying the reign of William Rufus, who

²⁶ 184 頁と 186 頁のあいだに 3 頁あり、185a、185b、186c という頁番号が書かれている。

²⁷ Mason において ‘Punctuation’ はその標題の文字サイズ、書体からすれば第 13 章 ‘Analysis of sentences’ の一部であるが、内容上かりに独立の章と見なして第 14 章とした。

succeeded his father A.D. 1087.”²⁸ “I will report this to my father, who is waiting to hear the news.”

(Mason 209 頁)

仮使其義与所区别之名物並非密切，雖不得此，其意亦明，如是区别子句，乃為附益之語，其前或後可以用逗：如云 “We are studying the history of Russia, *which is now in war with Japan.*” 亦如云 “I must report this to my father, *who is expecting this news every hour.*”

(『英文漢詁』238 頁)

ここでも、英国史を学んでいるという内容の文例が、“We are studying the history of Russia, which is now in war with Japan.”（我々は今日本と戦争をしているロシアの歴史を学んでいる）という文例に置き換えられている。ちなみに、先に見た例および「第 17 章 析辞」に見られる別の例と合わせて日露戦争に関わる文例が確認できた限りにおいて 3 件使われていることになるが²⁹、日清戦争に関わる文例は見当たらない。また、日本に関わる文例が使われている割には中国に関わる文例は意外なことにほとんどなく、「第 14 章 論句主謂語」に“The Chinese believe that the fox can transform itself into human and spiritual beings.”という文例が挙げられている程度である。

以上、『英文漢詁』が何を依拠資料とし、どのような調整を施して著されているかを確かめた。厳復の理解不足による基本的な次元の誤りも散見されるが、多くの箇所では文例を差し替えたり説明を追加したりして学習者の理解の便を図っていると言える。³⁰

²⁸ Mason では“1087.”のところで引用が閉じていないので引用符を補った。

²⁹ 「別の例」と言うのは、第 7 章の 198 頁に挙げられている“We inferred from this that the opinion of the Russian public was that the Japanese government was unwilling to fight.”（我々はこのことからロシア国民は日本政府には戦うつもりがないと考えていると推定した）という文例である。

³⁰ 付言すれば、沈(2018)によれば、詩人、言語学者の劉半農は『英文訓詁』について“内容は初歩的な英語の文法書に過ぎないのに古風で難解な中国語で書いている。同書を教科書として使うには学生はまず 10 年以上かけて古文を学ぶ必要がある”と批判したと言う。実際、『英文訓詁』が難解であることは出版元の商務印書館も公に認めており、1905（光緒 31）年の 7 月から 8 月にかけての『申報』に繰り返し掲載された新刊の類書の広告に“言英国文法之書，首推嚴幾道先生之英文漢詁。然其書實為漢文已深者說法，非盡人能讀也。”（英文法書と言え厳復先生の『英文漢詁』を第一に推す。しかし、同書は実のところ中国語の文章の深い素養をすでに身に付けた者のために書かれたものであり、万人が読めるものではない。）と書いている。中国の近代早期の文法用語はその後多く日本のそれに取って代われ、厳復の作った各種の用語も定着することはなかった。

とは言え、『英文漢詁』は最初の出版から少なくとも 30 年以上にわたって再版されている。確認することのできた最新の版は 1938（民国 27）年のものである。したがって、難解だからと言って必ずしも敬遠されていたわけではなく、多くの人に読まれ、少なくともそれなりの影響を与えたはずである。実際、『英文漢詁』における品詞名の訳語は当時複数の書籍に継承されている（後述）。

同書がどのように読まれ、中国人の英語学習にどのように貢献したかということは本小論の課題とする範囲を超えるが興味を覚える問題である。

6 早期英語文法書研究上の含意

以上の各節で見てきた通り、英文法に関わる早期の著作はいずれも基本的に依拠資料の抄訳である。したがって、そこに書かれた内容を直ちに作者自身の見解、見識として解釈したり賞賛したりすることはできない。

例えば、邱(2008)は汪鳳藻『英文挙隅』と張德彝『英文話規』の内容を紹介し、それぞれに書かれた英文法の知識の全面性、正確性、水準の高さなどをたたえ、それが各作者の達成であるかのように述べている。しかし、両書のそうした要素は底本として使われた英米各国の学校教科書の内容に過ぎない。例えば、『英文挙隅』が最初の9つの節で各品詞について逐一解説しているのはすでに見た通り Kerl の教科書の抄訳であるし(3節)、『英文話規』における9品詞の解説は Chambers 兄弟の教科書の抄訳であり、邱の言うような『英文挙隅』に基づいてその完成度を高めたものではない(4節)。

嚴復『英文漢詁』を論じた趙(2012, 2013, 2015 他)についても同じことが言える。例えば、趙(2012)は“嚴復は言語現象をその源流にさかのぼって考えることを重視し、例えば「第4章 名物部(Nouns)」の「変陰古法(Older modes of marking the feminine)」では過去における名詞女性形の形成法について例を挙げて説明している”という趣旨のことを述べているが、当のくだりは Morris の28～29頁の記述を訳したものである。また、“嚴復は英文法を説明するのに中国と西洋の古典から多く例を引くようにし、例えば「第7章 云謂部(Verbs)」の「論‘do’字用法」ではシェイクスピアの句を使っている”としているが、「論‘do’字用法」は Mason の74頁の記述の翻訳である。同様に、趙(2013, 2015 他)が嚴復の創意によるかのように書いていることもその少なからぬ部分が底本の内容の継承である。

この種の著作における作者の貢献、中国人による英文法理解の歴史を論じるためには、まず依拠資料を特定し、比較を通じて依拠資料から引き継がれた内容と作者による調整の要素を見分ける作業が不可欠である。

7 英語品詞名の訳語

本小論で考察した清末英語文法書4点における英語の品詞名の訳語を一覧できる形で示せば次の通りである。先行する時期のヴィルヘルム・ロプシャイト(Wilhelm Lobscheid、羅存徳)の *English and Chinese Dictionary* 『英華字典』4巻(1866～1869(同治5～8)年)における訳語も参考までに併せて示す。³¹

³¹ モリソンやメドハースト(Walter Henry Medhurst、麦都思)の英華辞典、モリソンやロプシャイトの英語文法書には文法用語の訳語があまり収められていない。英語以外の西洋の言語の辞書や文法書も含めれば観察の対象は増えるが、品詞名の訳語は事例ごとに異なり、本小論で考察した各著作に引き継がれてもいないので省略に従う。内田(2012)には多数の文献における訳語の対照表が掲げられている。

表 3 清末英語文法書 4 点における品詞名の訳語

	曹驥 『英字入門』 (1874年)	汪鳳藻 『英文举隅』 (1879年)	張德彝 『英文話規』 (1898年)	嚴復 『英文漢詁』 (1904年)	ロプシヤイト 『英華辞典』 (1866～1869年)
noun	実字	静字	実字	名物字	名、名字
pronoun	称呼字	代静字	替実字	称代字	替名字
article	綱目字	区指字	分指字	指件字	定名字、不定名字
adjective	加実字	繫静字	指実字	區別字	勢字
verb	動作字	動字	動字	云謂字	動字、生字
adverb	加動作字	繫動字	指動字	疏状字	勢字
preposition	位置字	縮合字	接連字	介系字	定倫字
conjunction	相連字	承転字	承転字	挈合字	繼字、連字
interjection	呼声字	発語字	発語字	嗟歎字	情呼字

すべての著作が現在中国で使われる日本語式の「～詞」ではなく「～字」という形の品詞名を使っている。その共通点を除けば各著作が独自の訳語を使っており、太字で示した少数の訳語を例外としてすべて相異なっている。そして、確認の限りでは、既存の辞書や文法書における訳語を参考にしたという証拠も見出せない。³²

いずれの著作の品詞名も最終的には廃れたが、汪鳳藻『英文举隅』の品詞名は 20 世紀初期まで全面的ないし部分的に継承された。仏漢辞典 Anatole Billequin *Dictionnaire français-chinois* 『法漢合璧字典』(1891 (光緒 17) 年)、フランス語で書かれた中国語学習書 Alexandre Théophile Piry *Manuel de langue mandarine* 『鉛槧彙存』(1895 (光緒 21) 年)、日本人のための中国語学習書である宮島大八編『支那語教科書 官話輯要』(1897 (明治 30) 年)の「第十章 文典 第一 話規」(張廷彦執筆)、中国人のための日本語学習書である大矢透著、金国璞・張廷彦校『東文易解』前編(1902 (明治 35) 年)などに使用が見られる。³³

また、嚴復『英文漢詁』の品詞名は 1910 年代までの時期を中心として言及、使用された。商務印書館が出版した多くの書籍——例えば、顔惠慶他編『英華大辞典』(1908 (光緒 34) 年)、王蘊章編訳『中学英文教科書』(1911 (宣統 3) 年)³⁴、『辞源』(1915 (民国 4) 年)——のほか、Ada Haven Mateer *New Terms for New Ideas: A Study of the Chinese Newspaper* (1913 (民国 2) 年)などにそれが確かめられる。

8 おわりに

19 世紀後期から 20 世紀初期にかけての時期に中国人によって著された英文法に関わる初期の著作 4 点について、それぞれの依拠資料を明らかにし、作者の行った編集上の処置について

³² 森島 忠 良 編、箕作 阮甫改訂『改正増補蛮語箋』(1848 (嘉永 1) 年)はオランダ語の *tussenwerpsel* (間投詞)を「嗟歎字」と訳している。『英文漢詁』の訳語はそれに一致するが、ほかの品詞については一致が見られないのでおそらく偶然の産物であろう。

³³ 汪鳳藻は 1891 年から 1894 年にかけて駐日公使などの立場で来日している。おそらくそのときに『英文举隅』を日本の言語教育者にもたらしたのであろう。

³⁴ 原書は今井信之『中学英作文独習書』(1908 (明治 41) 年)。奥付には「不許複製」に加えて「不許漢訳」の表示がある。

確かめた。いずれも英国、米国の英語教科書を底本とし、それに種々の調整を施したものであった。

依拠資料とのより綿密な対照に基づく分析の補訂と精密化については今後の研究に待ちたい。

余論 嚴復の著作の版權表示

『英文漢詁』を見て筆者が意外の感を覚えたことがある。それは初期の版の奥付における版權の表示に書かれた中国語に関わる。



黒色の円周に沿って書かれた「上海商務印書館印行」、「COMMERICAL PRESS SHANGHAI」の内側に円形の印影があり、大小の輪にそれぞれ“KNOW THYSELF”（汝自身を知れ）、「侯官嚴氏版權所有」と書かれている——「侯官」は嚴復の出身地の古名——。³⁵ 嚴復は日本人の作った訳語に対して批判的であったことで知られているが（黄(2008)、沈(2019)）、「版權」は copyright を訳して作られた和製漢語であり³⁶、そればかりか「侯官嚴氏版權所有」は中国語として本来文

³⁵ この版權表示は手の込んだ工程によっている。すなわち、一通り印刷された奥付の頁に赤色で捺印された円形の紙片——早期の例ではその周縁が鋸刃状であった——を貼り付け、その後に「上海商務印書館印行」と‘COMMERICAL PRESS SHANGHAI’を印刷している。そして、「上海～」と‘COMMERICAL ～’は一部が円形の紙片にかかり、割り印の状態を実現している。これはおそらく第三者による翻刻に加えて著者あるいは出版者による契約外の出版を防ぐことを目的とした措置であろう。

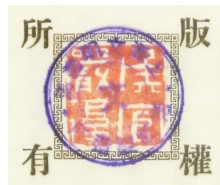
「上海商務印書館印行」は文字が右から左、「侯官嚴氏版權所有」は左から右に進む形で書かれている。後者は‘KNOW THYSELF’に合わせた横書きであり、前者は中国の伝統的な縦書き——横書きに見えるが、1行1字の縦書き——である（拙論(2026)）。

なお、版の進行とともに版權表示は簡略化が進み、印影は「嚴氏 / 版權 / 之印」という内容の正方形のものになり——「/」は改行を示す——、嚴復没後の版では印影の使用が廃止された。

³⁶ 福沢諭吉が「版權」の造語者であることがつとに知られている（石河(1932, 1935)）。当時の資料に直接基づいて述べれば、『東京日々新聞』1873（明治6）年8月23日号の投書欄に福沢による「千八百七十二年米国出版、ジョン、ハワウイルス、氏法律韻府第一冊第三百六十三葉、コピライト、ノ条抄訳」が掲載されており、そこに copyright の訳語として「版權」が現れる。そして、添えられた「訳者注解」で、「版權」が「出版ノ特權」を略したものであることが説明されている。当該の「法律韻府」（法律辞典）は John Bouvier *A Law Dictionary, Adapted to the Constitution and Laws of the United States of America*——作者 Bouvier 没後の増補版——の第14版（おそらく1870年初刊）の1872年に出版で

法上あり得ない日本語式の SOV 語順の表現である。

同じ版權表示は『英文漢詁』の前年に出版された翻訳書『群己權界論』（1903（光緒 29）年）——原著は John Stuart Mill *On Liberty*（1859 年）——を始めとする嚴復のほかの著作数点でも使われているが、『群己權界論』より数か月早く上海の文明書局から出版された翻訳書『群学肄言』（1903（光緒 29）年）——原著は Herbert Spencer *The Study of Sociology*（1873 年）——の奥付における版權表示には次のように「版權所有」と書かれている。その 4 字を頂点とする正方形の枠の内側に「侯官嚴復」の印影があり、それに「上海文明書局活版製造所」の青色の印影が重ねられている。



この「版權所有」もまた日本語式の OV 語順の表現である。

日本における「版權所有」という表現の使用は少なくとも 1876（明治 9）年にさかのぼるが³⁷、1887（明治 20）年に公布された版權条例によって出版物への記載が慣例化した。それは同条例の第 5 条で「版權登録ノ文書図画ニハ其保護年限間ハ版權所有ノ四字ヲ記載スヘシ」と定められたことによる。³⁸「版權所有」の記法に定めはなかったが、しばしば装飾的に描かれた方形の

ある。

Bouvier という人名の英語での発音を仮名で書けば「ブビエ」「ブーヴィエ」などになる。それを福沢が「ハヲウイルス」と書いたのは、英語の分からない発音を綴りと想像に頼って書く同人の習癖による。中国の英語学習書『華英通語』咸豐 5 年本（1855（咸豐 5）年）に福沢が仮名で注釈を加えた『増訂華英通語』（1860（万延 1）年）（拙論(2018)）において、ou という母音字の連続はしばしば「アヲ」として注音されている。hour を「アヲル」、pound を「パヲヌ_ド」と書くのはよいとしても、country を「カラヌトリ」、wounded を「ウ_ナヲヌデ_ド」としているのは純然たる誤りである。その方式で Bouvier の bou を注音すれば「バヲ」になり、そこから濁点を省いた結果が「ハヲ」である。福沢が米国の法律辞典の項目を抄訳したのは『増訂華英通語』の著作の 14 年後であるが、英語の発音を想像で書く癖が抜けていなかったことになる。「ウイ」の「ウ」は福沢が子音の[v]を表すために考案した「ヴ」の字の代用である（拙論(2018)）。最後の「ス」はおそらく福沢が Bouvier's という属格形を著者名と考えた結果である。原書の上記の版は扉の前に綴じられた出版者の序文と書籍広告で始まり、その冒頭の表題に「JUDGE BOUVIER'S LAW DICTIONARY」と大書されている。

³⁷ 「版權」の語を公式に使った 1875（明治 8）年の改正出版条例を受けてその翌年に発せられた内務省達乙第 131 号において「版權所有」という表現が使われている。

³⁸ 1899（明治 32）年の著作権法の施行によって版權の登録制が廃止され、「版權所有」を表示する必要もなくなったが、その後も半世紀以上の長きにわたってその表示が行われた。

枠の中に書かれた。³⁹



「版權所有」と「～版權所有」は、「所有する」を他動詞として使う——奇妙と言うべき派生的な用法であるが——日本語において「版權を所有する」「～が版權を所有する」という言い回しを圧縮して作られた、本来中国語では考えられない表現である。中国の過去の出版物では「版權所有」の代わりに「版權自有」とも書かれ、『英文漢詁』でも後年の一部の版には「此書有著作權」と書かれており、それらの表現であれば中国語として文法上無理がない。

嚴復が『群学肄言』や『群己權界論』『英文漢詁』などの版權表示において「版權」という和製漢語を使うのみならず⁴⁰中国語として破格な日本語式の表現まで使ったのはおそらく、著作による収入が自身の利害に関わる切実な問題であることから日本ですでに普及していた版權表示法にならうことによって權威性を演出しようと考えたということであろう——『群学肄言』の版權表示における装飾的な正方形の枠もまた日本の版權表示のそれによく似ている——。中国において「版權」の主張を始めたのは嚴復であった。「版權所有」の表示は横浜で出版された馮鏡如『新增華英字典』、英語書名 *F. Kingsell A Dictionary of the English and Chinese with the Merchant and Mandarin Pronunciation* (1899 (光緒 25) 年) の扉にも見られるが、今もなお中国で広く使われているその日本語式表現の普及に大きく貢献したのは嚴復の多数の出版物であろう。

文献

- 石河幹明(1932)『福沢諭吉伝』第2巻 (岩波書店)
 石河幹明(1935)『福沢諭吉』 (岩波書店)
 田野村忠温(2018)「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻
 田野村忠温(2021)『『啖咕喇国訳語』の編纂者と編纂過程—中国最初の英語辞典の分析—』『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61巻
 田野村忠温(2026)「横書き中国語の初期相—“中国初の横書き書籍”の議論をめぐって—」『東アジア文化交渉研究』第19号 (関西大学大学院東アジア文化研究科)
 董光和・张国乔(2004)「序言」董光和・张国乔編『醒目清心录』1 (全国图书馆文献缩微中心)
 高晓芳(2007)『晚清洋务学堂的外语教育研究』 (商務印書館)

³⁹ 右端の版權表示の例では「井上氏版權所有之章」という句が捺印されている。

⁴⁰ 沈(2019)の論考に基づいて判断すれば、嚴復が当時使った「～權」という形の語はおそらく「版權」だけであった。

- 黄克武(2008)「新名詞之戰：清末嚴復譯語與和製漢語的競賽」『中央研究院近代史研究所集刊』第 62 期
- 内田庆市(2012)「严复《英文汉诂》札记」『東アジア文化交渉研究』東アジア文化研究科開設記念号（関西大学大学院東アジア文化研究科）
- 欧梦越(2015)『《英文汉诂》：严复的跨文化视野阐释』（福建师范大学硕士论文）
- 欧梦越・林大津(2014)「严复《英文汉诂》考辨」『福建师范大学学报（哲学社会科学版）』2014 年第 2 期
- 邱志红(2008)「《英文举隅》与《英文话规》一同文馆毕业生编译的早期英语文法书」『寻根』2008 年第 5 期（大象出版社）
- 沈国威(2018)「近代书写语言的形成一文之类别与复音词」『関西大学東西学術研究所紀要』第 51 輯
- 沈国威(2019)『一名之立 旬月踟躕：严复译词研究』（社会科学文献出版社）
- 蘇精(1981)「汪鳳藻：從廣方言館學生到出使日本大臣」『傳記文學』第 38 卷第 1 期（傳記文學雜誌社）
- 赵玉玲(2012)「严复《英文汉诂》编纂指导思想研究」『宿州学院学报』2012 年第 12 期
- 赵玉玲(2013)「严复《英文汉诂》编纂特色研究」『牡丹江大学学报』2013 年第 2 期
- 赵玉玲(2015)「严复的语言观与《英文汉诂》的编纂」『现代语文』2015 年第 5 期（中国语文现代化学会）
- 邓文彬(2002)『中国古代语言学史』（巴蜀书社）
- 邹振环(2007)「翻译大师笔下的英文文法书—严复与《英文汉诂》」『复旦学报（社会科学版）』2007 年第 3 期
- 鄒振環(2009)「同文館外語教科書的編纂與外語教育的成效」王宏志・梁元生・羅炳良編《中國文化的傳承與開拓：香港中文大學四十周年校慶國際研討會論文集》（中文大學出版社）
- Williams, Samuel Wells (1837) 'Gaoumun fan yu tsä tsze tseuen taou, or A complete collection of the miscellaneous words used in the foreign language of Macao. 2. Hungmaou mae mae tung yung kwei hwa, or those words of the devilish language of the red-bristled people commonly used in buying and selling'. *The Chinese Repository*, Vol. 6, No. 6. [標題に含まれる 2 つの書名は『澳門番語雜字全套』、『紅毛買壳通用鬼話』。]
- Wong, Lawrence Wang-chi（王宏志）(2018) “‘Entrance into the family of nations’: Translation and the first diplomatic missions to the West, 1860s–1870s”. Lawrence Wang-chi Wong (ed.) *Translation and Modernization in East Asia in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries*. Hong Kong: The Chinese University Press.

近代東西言語文化接触研究会

本会は、16世紀以降の西洋文明の東漸とそれに伴う文化・言語の接触に関する研究を趣旨とし、具体的には次のような課題が含まれる。

- 1、西洋文明の伝来とそれに伴う言語接触の諸問題に関する研究
- 2、西洋の概念の東洋化と漢字文化圏における新語彙の交流と普及に関する研究
- 3、近代学術用語の成立・普及、およびその過程に関する研究
- 4、欧米人の中国語学研究（語法、語彙、音韻、文体、官話、方言研究等々）に関する考察
- 5、宣教師による文化教育事業の諸問題（例えば教育事業、出版事業、医療事業など）に関する研究
- 6、漢訳聖書等の翻訳に関する研究
- 7、その他の文化交流の諸問題（例えば、布教と近代文明の啓蒙、近代印刷術の導入とその影響など）に関する研究

本会は、当面以下のような活動を行う。

- (1) 年3回程度の研究会
- (2) 年2回の会誌『或問』の発行
- (3) 語彙索引や影印等の資料集（『或問叢書』）の発行
- (4) インターネットを通じての各種コーパス（資料庫）及び語彙検索サービスの提供
- (5) (4)のための各種資料のデータベースの制作
- (6) 内外研究者との積極的な学術交流

会員

本会の研究会に出席し、会誌『或問』を購読する人を会員と認める。

本会は、言語学、歴史学、科学史等諸分野の研究者の力を結集させ、学際的なアプローチを目指している。また研究会、会誌の発行によって若手の研究者に活躍の場を提供する。学問分野の垣根を越えての多くの参集を期待している。

本会は当面、事務局を下記に置き、諸事項に関する問い合わせも下記にて行う。

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 関西大学児島惟謙館2階

言語研究班室

E-mail: u_keiichi@mac.com

代表世話人：内田慶市